第13回

元気スイッチon!!
あつまれ！あいちのじどうかん

みんなで今、
アップデートしよう！

report

2024年11月3日［日・祝］

10:00-16:15 犬山市民交流センター「フロイデ」

主　　催：愛知県児童館連絡協議会、名古屋市児童館連絡協議会、愛知県児童総合センター（公益財団法人愛知公園協会）
共催（予定）：愛知県
企画運営：元気スイッチon!! あつまれ！あいちのじどうかん実行委員会
後援（予定）：名古屋市、一般財団法人児童健全育成推進財団、愛知県地域活動連絡協議会、全国児童館連絡協議会、全国児童厚生員研究協議会、中日新聞社

目次

目次 …… 01
開催概要・日程 …… 02
開会式 …… 03
基調講演 …… 06
第１分科会 …… 09
第２分科会 …… 12
第３分科会 …… 15
出前じどうかんーあそびばー …… 18
アピールカード …… 21
情報交換 …… 22
閉会式 …… 23
実行委員会 …… 24

開催概要

主　　催：愛知県児童館連絡協議会
　　名古屋市児童館連絡協議会
　　愛知県児童総合センター（公益財団法人愛知公園協会）
共　　催：愛知県
企画運営：第13回 元気スイッチｏｎ!! あつまれ！あいちのじどうかん実行委員会
後　　援：名古屋市
　　一般財団法人児童健全育成推進財団
　　愛知県地域活動連絡協議会
　　全国児童館連絡協議会
　　全国児童厚生員研究協議会
　　中日新聞社

日程

2024年11月3日（日・祝）
　10:00～10:30　開会式
　10:30～11:30　基調講演
　13:00～15:30　分科会
　15:45～16:15　閉会式

　10:45～15:15　あそびば

10：00～10：30
２Ｆ 201・202会議室

開会式

■　主催者あいさつ

名古屋市児童館連絡協議会
会長
沢井 史恵

おはようございます。名古屋市児童館連絡協議会会長の沢井史恵です。

よろしくお願いします。

関係者の皆さま、ありがとうございます。

さて、小中学生の不登校者数を知っていますか。最近発表された昨年度の不登校は過去最多の34万人を超えました。その中の多くの子どもたちが、どこにもつながらないまま毎日を過ごしています。児童館は、そうした子どもたちが来ることのできる居場所の一つになっているでしょうか。放課後児童クラブのある児童館で、学校に登校しない子どもたちを受け入れていますか。

何をしてもいい、何もしなくてもいい「何もしないことの保障」をしていますか。

安全を第一優先にすることに注力しすぎて、子どもたちを管理する場にはなっていませんか。規則だからと何も疑問を持たずにいませんか。良かれと思って先回りをしすぎて、子どもたちから失敗する機会を奪っていませんか。安心して失敗できる場になっていますか。子どもは失敗を通して、自らの力で成長していきます。

今年のテーマは、「みんなで今、アップデートしよう！」です。私たちの役割について、今一度考えるきっかけにしましょう。

基調講演は、西川正さんです。岡山県真庭市での図書館の実践を通して、公共施設でも、こんな面白いことができるのだというお話をしてくださいます。

今日一日の学びの中で、明日からできる小さな一歩を考える機会にしましょう。

学んで遊んでいい一日を共に過ごしましょう。

どうぞよろしくお願いいたします。

■　共催者あいさつ

愛知県福祉局子育て支援課
課長補佐
花村 広美 様

ただ今、ご紹介をいただきました愛知県福祉局子育て支援課の花村でございます。

本日は「第13回 元気スイッチon!! あつまれ！あいちのじどうかん」に、大変多くの方々にご参加いただき誠にありがとうございます。

また、皆さま方には、日頃から児童館や放課後児童クラブなどにおいて、未来を担う子どもたちの健全な育成に向けてご尽力をいただいており、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。

さて、昨今では、地域のつながりの希薄化や少子化による子ども同士の育ち合い・学び合いの機会の減少等により、子どもが地域コミュニティの中で育つことが困難となっております。このため、子どもが安全に安心して過ごせる児童館の重要性が今後ますます高まっていくものと考えております。

本県におきましても、愛知県児童総合センターにおいて、蓄積してきた様々なノウハウを活かし、県内児童館の中核的機能を担いながら、地域の児童館の活動支援を行うとともに、子ども・若者の心身の安全が確保され、安心して過ごせる居場所づくりの促進を図るなど、地域の児童館活動の充実に努めているところでございます。

今後とも、皆さま方と協力・連携しながら、児童の居場所づくりを始めとする子育て支援の充実に取り組んでまいりたいと考えておりますので、お力添えのほどよろしくお願いいたします。

なお、本日は、NPO法人ハンズオン埼玉　西川副代表理事より「ともに　あそび　つながる場所をめざして～『お客様時代』の中で～」をテーマとした基調講演をいただき、また、様々なテーマに沿った分科会が行われます。

少子化、コミュニティの減少や孤独、不登校、ネットいじめなど子どもたちを取り巻く課題が複雑になる中、本日のこうした機会が、皆さま方が現場で抱えている課題に対する解決の一助となりますことを期待しております。

最後になりますが、本日ご参加の皆さま方の益々のご発展とご健勝を祈念いたしまして、私からのあいさつとさせていただきます。

■　来賓あいさつ

愛知県地域活動連絡協議会
会長
加藤 愛子 様

皆さま、おはようございます。

ただ今ご紹介にあずかりました、愛知県地域活動連絡協議会の加藤でございます。

本日ここに、「第13回 元気スイッチon!! あつまれ！あいちのじどうかん」が開催されますこと、誠におめでとうございます。

今年のテーマは、「みんなで今、アップデートしよう！」と伺っております。

児童館は子どもたちにとって大切な居場所であります。親でもなく、学校の先生でもない職員の方々に優しく迎え入れていただける場所であります。それゆえ、職員の方々の役割は、ますます重要になっているのではないでしょうか。

本日は、県内各地よりご参加されると伺っております。地域で子どもたちに関わっておられる方々にとりましては、さまざまな人々と地域を超えて繋がっていることが最も大切なことであると感じており、私どもの役員も学ばせていただきたいとの思いで参加させていただきました。本日は、有意義な交流の場になられることと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

子どもの「健やかな育ち」に関わることは、直に結果や成果が表れるものではありません。しかし、たくさんの愛情を受け、皆に大切に育てられた子は、やがて大人になり、次の世代の子どもたちを大切に育てていくのではないでしょうか。そして、子や孫の世代に受け継がれていくと思います。

私たち愛知県地域活動連絡協議会は、愛知県母親クラブとして設立され、現在では、「みらい子育てネット」として、児童館を拠点に活動しているボランティア団体です。私たちの主な活動は、子どもを事故から守るための事故防止活動として、県内の公園の遊具や防犯の点検、子どもたちを交通事故から守るために会員手作りのマスコットを配布する交通安全街頭活動でございます。また、親子の交流活動など、常に子どもの健やかな成長を願い、さまざまな活動をしております。

「秋のこどもまんなか月間」における「子ども若者育成支援県民運動」が11月1日から30日まで1か月間始まりました。スローガンは「はぐくもう　自分らしく生きる　愛知の子」です。子育て世代を取り巻く環境は大きく変化しております。ネット犯罪に子どもたちが巻き込まれる報道などを耳にしますと、心が痛みます。大切な子どもたちを守っていくため、私たちは「地域の子はみんなわが子」の思いで児童館の職員の方々にご協力頂きながら今後も活動して参ります。

本日の大会のご成功と、ご参加の皆さまのますますのご活躍をご祈念申し上げ、私のあいさつとさせていただきます。

10：30〜11：30
2 F 201・202会議室

基調講演

”ともに　あそび　つながる　場所をめざして”
〜『お客様時代』の中で〜

［講 師］ **西川 正さん**
特定非営利活動法人ハンズオン埼玉　副代表理事

【プロフィール】
NPO法人ハンズオン埼玉副代表理事。岡山県真庭市立中央図書館長。NPO法人あげお学童クラブの会元理事・現相談役。学童保育所、出版社、NPO 支援センター等を経て、2005年、ハンズオン埼玉を設立「おとうさんのヤキイモタイム」キャンペーンなどコミュニティを育むさまざまなプロジェクトを提案。まちづくりや子育て支援の研修等の講師やファシリテーターとして活動。元 恵泉女学園大学特任准教授。立教大学・大妻女子大学等で非常勤講師。著書に『あそびの生まれる時〜「お客様」時代の地域活動コーディネーション』（ころから）等。

子どものwell-being／安心と冒険

（傘を差さずに雨の中に入っていく幼児の映像。興奮して、時折大きな声をあげてうれしそうに手を上下にふる。雨という言葉もまだ知らない。時折カメラの方を振り返る姿）

この子がこうして雨の中を遊ぶことを保障するには、私たちはどんな環境を整えればよいでしょうか。いま、この動画の中にはお父さんお母さんがいますが、例えば、もし24時間、お母さんが一人でこの子を見ていたら、きっと「またそんなことして」と怒ることになるのではないでしょうか。子どもが安心して遊ぶためには、親の環境を変える必要があります。親が休めるように労働環境や福祉環境を整えるなど親の安心を保障する必要があります。そのうえで、ひとりで子どもをみる状態ではなく、みんなで見ることができる環境をつくる必要があるということです。みんなで見れば「まだ笑っていられる」かもしれない。
この遊んでいる状態は、今風の言葉でいえば、well-beingの高い状態です。
この子は、時々、ふりかえります。その先にはお母さんがいます。この安心できる場所(基地)を大人が保障できるかどうかが大切になります。冒険（「やってみよう」）は安心から生まれます。
親が、子どもに安心を保障するには、親もまた安心を保障されている必要があります。では、親の安心をどうやってつくるのでしょうか。
「みんなで見守れる関係」をつくっていくことは児童館職員の「専門性」の一つだと思います。難しいことですが、そこを考えていきましょう。キーワードは、“安心”と“もちより”です。

「正しい場所」と「楽しい場所」、あなたならどちらへ行きたいですか

「図書館を核にまちづくりを」という依頼をうけて、現在図書館長として、月の半分を岡山県真庭市で過ごす生活をしています。
図書館ではクリスマスに図書館の建物全体を外から赤いリボンでラッピング風に飾り付けをしたり、窓ガラスにみんなで「アート」をつくったり。そのほかにも様々なちょっと「馬鹿らしい」取り組みをしたりしています。それは、「この図書館ならなにか一緒にやってくれるかもしれない」と思ってもらえる図書館を目指しているからです。
一般的に図書館はすごく「正しそうな場所」で「ちゃんとしなきゃ」いけない場所のイメージがあります。本が好きな人にとっては楽しい場所だけど、そうでない人にとっては「正しい」場所です。「正しさ」を押し付けてくる場所に人は寄っていかないですよね。それやめたいんですよね。何をしても大丈夫。いわば「うるさい図書館」を目指しています。みんなでしゃべれるような。敷居を下げると、やりたいと思っている人が来てくれるんです。『こんなことやれますかね』と。リボンはそんな人たちへのメッセージなんです。
うちの図書館は、貸出冊数は増えていないけれど、来館者は増えているんです。小学

生たちが日々たくさん来てくれます。Wi-Fiもあり、スマホ充電もでき、時には玄関先で野球が始まることもある自由な雰囲気の図書館です。
けれど、ある日小学生の来館がなくなりました。その理由は、住民から学校へ苦情が入り、小学生たちへ図書館に迷惑をかけないよう学校で指導したということでした。そこで「今度から直接図書館に言ってもらうように返事をしてください」と学校に話を伝えました。なぜなら、住民が言いつける、学校が動く、という大人のやり取りから子どもは「自分に嫌なことがあったら誰かに言いつければいいんだ」ということを学びます。苦情があると新たなルールや禁止が作られていきます。結果、子どもは遊ぶことができません。well-beingが低くなっていくということです。
直接話し合うことができればそこに対話が生まれます。そこから問題解決へとつながっていきます。そうすることで子どもたちが“自分たちの場所を自分たちでつくっていくこと”を学べます。これが自治です。児童館もここに軸をおかないとしたら、何をする場所なのでしょうか。
保護者も同じです。よく児童館などで、保護者がこの当事者意識を持っていない、お客さんになっているという愚痴をよく聞きます。こうした課題意識を持つことは大事だけれど、『親が当事者意識を持っていない』という目線でみると、それは親を評価したり正しさを押し付けていることになり、結果、信頼関係は生まれていかないのではないでしょうか。保護者と一緒に場をつくるということが必要なのではないでしょうか。

サービス産業化・お客様時代

30年前に学童の指導員をしていたことがあります。保護者による共同保育でした。学童の指導員時代、様々なトラブルがあれば保護者同士、指導員も含めみんなで話し合っていました。コミュニティをつくっていました（コミュニティモデル）。
その10年後に、私の子どもが保育園のとき、ちょっとでもけがをすると保育士さんたちがすごく謝るんです。それで、『これくらいのことで謝らないでください。けがをしないで育つ子どもなんているんですか』とたずねたら、『今そんなことを言ってくださるのは西川さんぐらいですよ』と言われました。時代が変わったことを実感しました。保護者からの苦情に萎縮し、リスクを伴う遊びや行事を避けるようになってしまっていたのです。
背景にあるのは、サービス社会、お客様化です。1990年代から「公共サービス」と言われるようになりました。
昔は、みんなで協力して行っていたことや人の関係も、サービスを提供する側とサービスを受ける側（お客様）へと変わっています。保護者同士の関係は消え、要望や苦情を保育士ではなくその上（役所や所長）に「言いつける」。そうすると、「何かあったらどうするの？」と、役所や管理する側は禁止やルールを設けるようになるのです。保育士の保護者に対する不信感も高まります。
保育も託児サービス化。サービスを受ける側になる（お客様になる）と「文句」が出てきます。苦情から始まり、禁止ルールが増え、結果、子どものwell-beingが減るということにつながっているのではないでしょうか。
保育者は子どもを監視する役となって、毎日『ダメだ』という仕事が面白い訳がない。保育者にかぎらず、子どもに関わる仕事に就く人が減っていくのは当然ですよね。

ヤキイモタイム

サービス化に気づいて始めたのが、ヤキイモタイムです。20年続けてきました。地域・人とのつながりをつくる場として焚き火をしたいという方に、生協から寄付されたお芋を送って応援するというキャンペーンです。PTA、おやじの会、町会、児童館、学童、いろいろな集まりにお芋をお送りしています。
一緒に食べておしゃべりをするだけですが、これ（不要不急）が大事だと思っています。保育サービスを受ける側になると親同士が関わらなくて良くなります。そうすると、何か問題が起こった時に親同士が初めて話をするということになりますが、それは緊張が非常に高い状態で関係がスタートしてしまうということ。つながりを“糸”とするなら、「緊張した糸」ではなく「ゆるんだ糸」で関係を結ぶことができていた方が良い状態になります。「何かが起こる」前に親同士が知り合っていることが大切になるということです。つまり、人の関係に遊びを持たせておくということです。予め仲良くなっておくと、子どものトラブルやケンカを”子どものケンカ”にしておくことができるんですよね。それがないから小さな子どものケンカが、あっという間に大人のケンカになってしまうんです。自分の子以外の子を知らないという保護者を減らすことが、子どもが自由に遊ぶ環境をつくるのだと思います。

心と体をどうやってあたためるか

子どもが遊んでいるとき、頭は働いていないが心は動いています。『あそべ！』と言われても心は動かないし、『あそばなきゃ』と頭で考えていては遊べません。それなら、心と体をどうやったらあたたまるでしょうか。

（中学生と大人でおこなったワークショップ「トークフォークダンス ～大人とのしゃべりば～」の映像がスクリーンに映る。）

「中学生と大人がそれぞれ円になり席を移動してテーマについて話すだけです。そのとき、相手の言うことを否定せず、お互いに傾聴します。アドバイスや“お説教”はしません。「大人になってよかったなと思ったことはなんですか」「大人はズルいと思うことはなんですか」これらの質問に対して、中学生・大人が「話す・聴く」を交互に行います。スクリーンに映る中学生も大人も良い表情です。well-being ってこういう表情のことをいうのかなあと思ったりします。
では、少し、やってみましょう。

ワーク「ペアでトーク」

（席の近い同士でふたり組になり、1分ずつ話す側と聞く側を実際に体験。最初に話す側の人は「子どものとき、『あれは楽しかったなあ』という遊びの思い出を教えてください」という質問。次に、話し手と聞き手を交代し、「あなたの苦手なことは何ですか」という問い。「えーーーーー」「なんだろう？？」と参加者から声が上がる。そこに「思いつかない人は、『うーーーん…』と言っ

て1分を終わってください」と指示が入ると、会場は笑い声に包まれた）

「answerとresponse」答えと応え

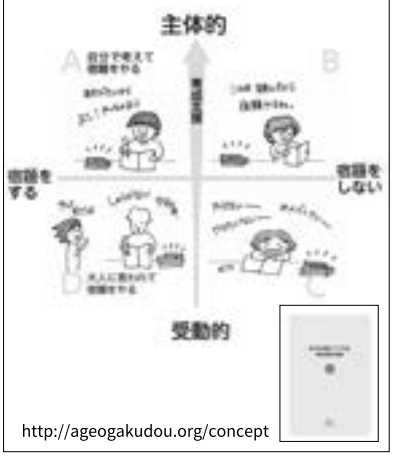
世の中が評価に溢れ、親も子育てを評価されてきています。そうした中で安心を得られていません。心をあたためるためには、評価せずその人の話を聴くこと。そうするとみんな元気になっていくと思う。日本語の「こたえ」の意味には“answer”と“response”ふたつの意味がありますが、大切なのは“response”の方だと思います。評価をせずに聴くということです。最初から答えを持っている人は相手を評価してしまいます。そうなると、相手は話さなくなります。

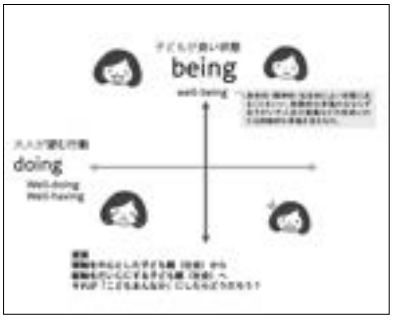
児童館や学童という場所は、子どもたちを評価する場所ではないですよね。学童などで支援員が、ケンカなどがあったときに単純に問題行動について禁止をする（ケンカをするなとか）のではなく、子どもの話に耳を傾けていくことを続けていくと、子どもは「安心」するようになります。特に立場の弱い1年生に対してそうしたことをしていくと、3〜4年後に自分たちが高学年になったときに今度は1年生に対しての接し方が自分がしてもらったように変わります。聞いてくれるようになります。大人の声がしなくなります。聴いたり、対話していくことで子どもたちの自治へとつながっていくのです。

子どもたちと一緒につくる

今、「できた・できない」の結果を求められる社会ですが、地域みんなでwell-being（良い状態）を目指していけるとよいのではないでしょうか。「その子が毎日どんな時間を過ごしているか」に目を向けられるような社会をつくっていく必要があります。例えば、学童での宿題ひとつとっても、「はい、今から宿題の時間だからやります」と支援員が決めるのではなく、子どもが自分で宿題をやるか、やらないか、を決めることができる状態、それが子どものwell-beingを保障するということになるのではないでしょうか。育成支援とは、子ども自身が自分で決める、自分たちで場をつくる、生活をつくっていくことを応援することではないでしょうか。『学童で宿題をやらせてほしい』という親の要望に対して、代行してやらせる、やらせないということではなく、軸を変えて、言われたからではなく、やる/やらない、いつやる、どうやる、をその子自身が決められるようにしていくことです。失敗しながら、だんだんにできるようになっていくことにつきあうのが育成支援なのではないでしょうか。横軸のやる/やらないではなく、縦軸のいい状態かどうか、に視点を移して、子どもたちにかかわる、あるいはかかわらない（見守る）必要があるのではないでしょうか。親と一緒にめざすのは、横軸のやる／やらないではなく、縦軸の主体的に（忖度ではなく）自らの時間を自らのものとしていくことなのではないでしょうか。その視点で親に話しかければ、対立ではなく、協力してやっていけるのではないでしょうか。支援員がどのようなことを大切に子どもたちと過ごしているのかを親に伝えていけばよいと思います。

軸をかえてみること
例えば、学童保育の「宿題」





子どもたちはなにものかになっていく人でもありますが、同時に子どもたちにとってはその過ごしている“その今の時間”が子どもたちの人生なのではないでしょうか。子どもたちが自分の時間を生きるための環境をつくるのが、私たち大人の責任ではないでしょうか。もちよって、一緒に食べて、一緒に働いて（お客さんにしないで）、大人の安心をつくっていくところから始めてみてはいかがでしょうか。